

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

かけがえのない「水」への思い

愛媛県 松山市立椿中学校 三年 天野 加奈子

私には水にまつわる楽しい思い出がある。幼い頃、父の仕事の関係で松山市外に住んでいた。そこは自然が豊かで、休日には川辺で水遊びやキャンプをしていた。身近なところに豊かな水があふれていた。また、夏休みになると、松山に住む祖母のところにいき、いとこたちと水遊びをしていた。ホースで水の掛け合いをしたり、ビニールプールで泳いだりした。

「水は冷たくて気持ちいいから、楽しく遊んでいいんだよ。」祖母の優しい言葉とみんなの笑い声が、今でも耳に残っている。

数年後、私たちは松山に引越して、祖母の近所で暮らすことになった。そこで最初に驚いたのが、近くを流れる重信川の水量の少なさだった。河原は石ころだらけで、川遊びをしている人をほとんど見かけない。至るところに「水を大切に!」「節水しよう!」というポスターやシールが貼られている。松山の人は水を大切にしていることを知った。なぜだろう。その疑問を、父にぶつけてみた。するとこう返ってきた。

「おばあちゃんの家は、昔農家だったから、水源が地下水なんだ。だから普段は気にせず、自由に水を使っている。でも、一般の家庭は、ダムから引いた水道を使っているから、節水に気を付けなければならぬ。そして、他のどの地域よりも松山の人が水の使い方に敏感なのは、ある出来事があったからなんだ。」

父は話を続けた。

「加奈子が生まれるずっと前の平成六年、松山で大渇水が起こった。雨が降らないせいで、ダムの水が涸れてしまった。給水制限があり、一日に二、三時間しか水が出ない日もあった。給水車が地域を回って水を配ったりもした。」

「じゃあ、お風呂やトイレは?」

「入りたいときにお風呂に入れないから、タオルで体を拭いて我慢したこともあった。バケツに水を溜めておき、ひしゃくですくってトイレに

流していたよ。渇水のせいで、当たり前の生活ができなくなってしまったんだ。もつと困っていたのは、水を使う仕事をしてきた人たちだった。知り合いの理髪店では、お客さんの髪を洗うためにバケツに水を溜めていたけど、それが足りなくなると、営業時間を短くするなど、本当に苦労していた。」

父の話に大きな衝撃を受けた。そして、松山の人たちが水を大切にしている理由が分かった。水は当たり前にあるものではないことを、身染みて知っているのである。

振り返ってみると、私にも水の大切さに気付く機会があった。公共のプールの開始が遅れたのはなぜだろう。テレビをつけると毎日石手川ダムの貯水率を放送しているのはなぜだろう。前に書いた理髪店は、大渇水の後、お店に貯水タンクを設置したらしい。水を出しっ放しにしている自分が、ひどく恥ずかしくなってきた。

人類は大昔から、水のあるところに村を作り、田畑を耕して生活してきた。水の豊富な大河に沿って文明が栄え、私たちの暮らしのもととなった。生命の源である大切な水を私たちのところに届けるために、ダムや河川、浄水場、水道課など、多くの方々が関わってくださっている。これらのことを、忘れてはならない。

今回のことで、水についてたくさんのお話を学んだ。水について知り、考えることができた。蛇口はこまめに止める、水を溜めて食器を洗う、お風呂の水を再利用するなど、これからの生活を見直すきっかけになった。

かけがえのない資源「水」

これからも水と、届けてくれる方たちへの感謝の気持ちを大切にしていきたい。水資源を守るために、身近なところから、「節水」につながる取り組みをしていきたいと思う。